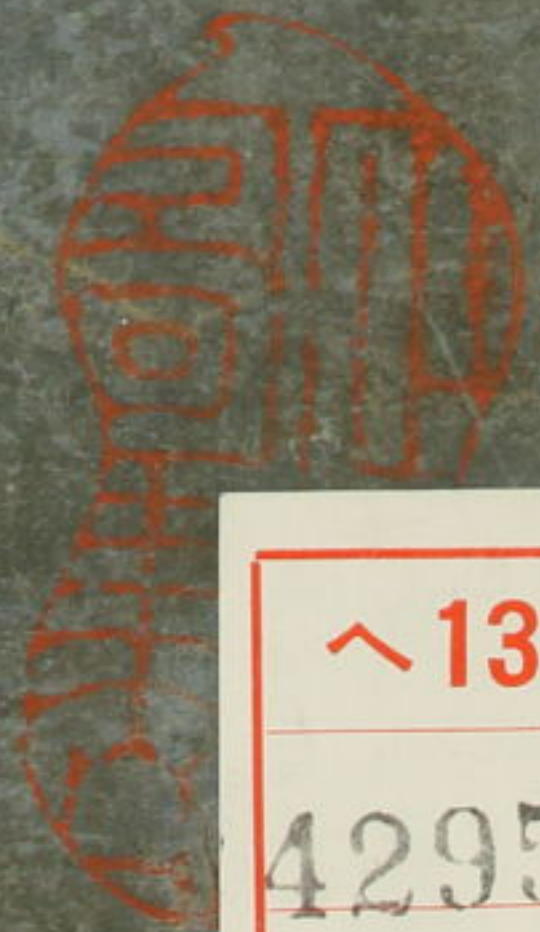
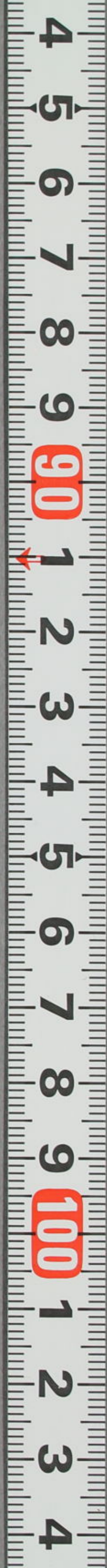


辰巳
 辰巳
 婦言
 式亭三馬著

辰巳婦言
 辰巳遊
 活月立の部
 北部



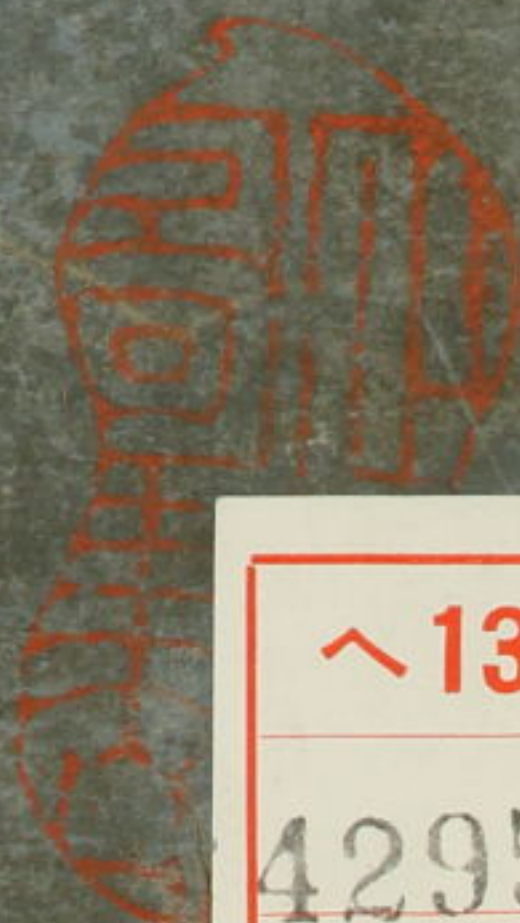
~13
 4295
 1



式亭三馬著

石陽歌譚

二



^13
4295
1

△後座より座する三人一坐ハ何となく却てうたふ
 まるく日曜り系性高く唯通人の口まほ
 しく悪く其の果しきまゝ寒夜う衣
 とあるが延喜帝より一あざくおざけり是
 ある日髪結床々交々なるらるる

盛遊部

志の如 志の如と高人のひまむすまむ部を住のこ
 かねる於合ハチトウらけきとほか小判アま
 金身身は遊ビヨまらひのれを能者乃二細し揚清
 子道のつくりやまや不むらうりや風をく切の持こ
 る客を弁ハ青きりこトはあ今座のり解
 夜長衣付るまの袖つまの合志まハ夫の者
 清美備酒屋のこの才多りののらと備人
 の常とらんと横がしし不 結ハ金かばは
 年廿三

のあが院之らまの又通の鼻後袋さの
 小使所りん通トウ 細兵とゆま
 小出合ニ 倉すやせりふ有 厨下
 ぬまのとなふりとする
 雪でもしやうま景色よ
 田の
 源 横笛実太鼓の源へるの帯志り
 角のあまのまのヨウつてとさげ天客ハとす
 まふちりし兄さんくと夜人よりとる
 多りつらとま物と合はるまものせ
 毛こらやめ而でぞかくさね
 て著るくら 義彦みは 源の賛とよの
 源

ありちやア尻をさへんむんハタねらふ
 ありと附合しう丹をさへんむんハタねらふ
 日ありははぶらうさげき
 地めく福をさるり。記ませんー
 ゆん産親多うさぎ。子方のからが
 くらうつ。記ませんー
 有から福うやまぬん
 移るぬまぬん
 田コレ 抄まぬん
 田コレ 抄まぬん

今夜ハ
 今夜ハ
 今夜ハ
 今夜ハ

朝直乃部
 霽泊乃部

進而後編を以て

趣向ハ出来りしむとテ數余りありしむ不著

先ず新なる新の儀も其所の自を操
 と藤く。かゝる多國乃使客小室情を
 とも。是なるも。此か。嗚呼。是非とわ
 室也。色公思案乃外。と。迷ふと
 色。悟る。と。色道の。徹不徹
 了。依を。世。通。君。子。レ
 さん。さん。お。さん。

石場 辰巳婦言大尾
妓談

或は主人敷作の力但平古石新石と案
 是を執手ふ持と土頭と和と僅石か
 こは。と。維。産。鋪。も
 なく。俵。投。ら。る。床。と。流。さ。の。を
 問。夫。多。室。居。實。情。少。平。人。石。を。と
 煙。石。安。入。ト。コ。コ。リ。キ。お。古。を。と。方。言

能通令の鰐石の替りくと疑ふ真
の吐乃加てい存の石も
餘の尻尻あつた赤本仙の羊の
あもせよ未一部の破りふ未櫻り
と折振り唯野暮り
ゆもきり立十五貫目内一
志くすて莫志のり

純く亭主人祭和撰述の

暖ノモ

羽根さくく百増の権牙魂と共々塵空
みとれびるもさるて癡夫克傾城とらさす
とハ是錢術は徳あり。這箇先生さ
燈は光とあふもあまの日積と探
毒言の趣向はかまが道おとい辰巳の
と身通も其洒落も変新地の端は接

